

〔第32回学術集会 特別講演〕

生み・育ての今を追う

静岡大学人文社会科学領域

白井 千晶

「生み育ての今を追う」ことによって、私たちが「当たり前」だと思っている家族を皆さんと見直してみたいと思います。

住まいに注目してみると、日本では時代、地域やなりわいによって、様々な住まいがありました。住まいを「ハコ」とすると、そこに入るのは「親族」とは限りませんでした。さて、家族は親族とイコールかという、そうでもないですね。では「家族」とは何でしょうか。講演の時間では、まず初めに住まいに注目しながら、そこでどんな暮らしがあったのか、紐解いていきたいと思います。

例えば、かつては「親方—子方」のように、「社会的なオヤコ関係」がありました。感染症や出産などで誰がいつ亡くなるか不確定だった時代には、「生物学的なオヤコ関係」よりも、社会的なオヤコの方が、長い関係だったこともありますし、セーフティネットとして複層的なオヤコ関係を作ってもいいました。それが、生物学的オヤコが前景化するようになり、生物学的関係を基盤にした核家族が住まうようになります。

法制度も確認しておきたいと思います。国家、企業、家族が三位一体である日本型制度の中で、ジェンダーを軸にした家族政策とリプロダクション政策が進められてきました。ロマンチック・ラブ・イデオロギーに基づく「性—愛—結婚」の結びつきによ

り、「愛の結晶」として「血のつながった」親子が志向されるようになったのです。

情緒的な結びつきが求められる一方で、「家族」はますます小さな単位になり、孤立化しています。確かに私たちは、法制度や様々な社会環境の影響を受けていますが、しかし、それだけではありません。私たちは社会に規定されるだけでなく、枠組みを飛び越えていくポテンシャルをも持っています。再び、だれがだれとどんなふうに住らすかという事例に立ち返り、現代から未来の姿を映し出していきたいと思います。

略歴

専門は家族社会学・医療社会学。全国養子縁組団体協議会代表理事、養子と里親を考える会理事・編集委員長、日本ファミリーホーム協議会編集委員、写真と言葉でつむぐ「フォスター」代表、子どもアドボカシーセンターしずおか代表理事、子どもアドボカシー学会理事。

主著に、『性暴力サバイバーが出産するとき：子どもの頃に性的虐待を受けた女性が出産するときに起こることの理解と癒し』（監訳・訳、ともあ出版、2022年）、『フォスター：里親家庭・養子縁組家庭・ファミリーホームと社会的養育』（著、生活書院、2019年）など。